



Title	マクルーハン理論の「転換」
Author(s)	浅見, 克彦; Asami, Katsuhiko
Citation	経済學研究, 53(3), 299-314
Issue Date	2003-12-16
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5357
Type	departmental bulletin paper
File Information	ES_v53(3)_17.pdf



マクルーハン理論の「転換」

浅見 克彦

ハーバート・マーシャル・マクルーハンは、1979年9月の末、トロントのCentre for Culture and Technologyで脳卒中にみまわられてから、80年の12月31日に永眠するまでの1年3カ月あまり、話すことも読むこともできなかった。62年に*Understanding Media*¹⁾ (以下、*Understanding*と略記する)が出版される以前からの友人であるジョン・カルキンは、病床の彼を見舞っている。そのとき彼は、マクルーハンの最後の思考が散りばめられた*Laws of Media*²⁾ (以下、*Laws*と略記する)の草稿を目にする³⁾。草稿に関する彼の印象は、「彼のあらゆる著作のなかでもっとも直接的で、論理的に組み立てられていた⁴⁾」というものだった。彼は、この印象をマクルーハンに伝えた。

私たちが顔をあわせる最後の機会となったそのときに、私は、その書物の草稿を読んで、これは、彼の著作の最良の典型である*The Gutenberg Galaxy*や*Understanding*に匹

敵するものだと思うといった。彼は、そのとき話すことができなかつたけれども、一生懸命にうなづいていた⁵⁾。

実は、こうした印象は、*Laws*と同時期の姉妹篇ともいべき*Global Village*⁶⁾についても、同様にあてはまる(マクルーハンの「最後の書物」は、正確には、*Laws*の翌年に刊行された*Global Village*である。もっとも、両著作には同じ素材からなる部分がかなりあり⁷⁾、両者をあわせて最後の書物といふべきかもしれない)。確かに、マクルーハンの晩年の両著作は、*Mechanical Bride*⁸⁾や*War and Peace in the Global Village*⁹⁾ (以下、*War & Peace*と略記する)などと比べた場合、あるいは*The*

5) *Ibid.*, p.110.

6) M. McLuhan and B. Powers, *Global Village*, Oxford Univ. Pr., 1989 [『グローバル・ビレッジ』青弓社].

7) *Laws*の2章の8割以上が、*Global Village*の4-6章の各所の叙述と、前者の3章の5割以上が、後者の2章の叙述と重なる。両著作は、かなり共通した草稿類を、異なる形で編集したものといえよう。実は、マクルーハンの最後の著作に関しては、編集問題と「分担問題」が存在する。ちなみに、*Global Village*に関して共著者のB・パワーズは、1-6章はマクルーハンの熟考だとしているが、7-9章が彼の校閲をへたかについて明言していない。厳密に言えば前者も、マクルーハンの叙述だと即断はできないが、本稿では、ひとまず編者を信頼して、両著作ともマクルーハンの著作としてあつかう。

8) M. McLuhan, *The Mechanical Bride*, Routledge & Kegan Paul, 1967.

9) M. McLuhan, Q. Fiore, *War and Peace in the Global Village*, Bantam Books, 1968.

1) M. McLuhan, *Understanding Media*, McGraw-Hill, 1965.

2) Marshall and Eric McLuhan, *The Laws of Media*, Univ. of Toronto Pr., 1988 [『メディアの法則』NTT出版].

3) 病床のマクルーハンは、長男エリックの協力で*Laws*の草稿を練り直していたとされている (Cf., W. T. Gordon, *Marshall McLuhan*, Basic Books, 1997, p.295).

4) J. Culkin, 'Marshall's New York adventure', in G. Sanderson and F. Macdonald (eds.), *Marshall McLuhan The Man and His Message*, Fulcrum, 1989, p.109.

*Gutenberg Galaxy*¹⁰⁾ (以下、*Gutenberg* と略記する) に比しても、全体構成の整った理論的なものという印象を与える。だが、より重要なものは、それらに含まれる内容面での理論的進展である。

1. 「図-地」関係の視点からするメディア分析の精緻化

最晩年の *Laws* と *Global Village* において、マクルーハンはそのメディア理解を理論的に深化させているように思われる。最初に注目すべきは、両著作で頻繁に登場する、「図-地」の理論的枠組による理論の精緻化である。

「図-地」関係とは、「ルービンの杯」で知られるデンマークの心理学者、E・ルービン Rubin が定式化したゲシュタルト的な知覚理解の枠組をさす。マクルーハンは、晩年の両著作で、特定のメディアを「図 figure」、それを取り囲む社会的環境を「地 ground」として整理するかたちで、この枠組を頻繁に使用している。たとえば、自動車という「図」が、徒歩や馬車に根ざした社会的な組織形態の衰退、都市のスプロール現象や大気汚染の発生といった「地」の変容をもたらしたという分析がある (*Global Village*, p.11 [28]¹¹⁾)。あるいは、両著作とも、J・エリュル Ellul のプロパガンダの理解を引きながら、メディアの作用が、その「地」である社会環境全体におよぼす影響に注目すべきことを強調している。

「直接的なプロパガンダの前に、社会学的な性格をそなえた緩慢で、全般的で、好ましい予備的な態度の空気、雰囲気を出しよとするプロパガンダがなければならないので

ある。」このように地が用意されたあとで、全体的な文化の地そのものが流動化されねばならない。メッセージではなく、全体的な地の相関的構成を新たに生み出すことがプロパガンダなのである (*Laws*, p.114[28], *Global Village*, p.26 [54])。

この叙述は、周知の「メディアがメッセージである」(*Understanding*, p.7) を想起させる。伝達されるメッセージ内容よりも、メディアが社会の文化状況に「導入するスケール、ペース、パターンの変化」(*ibid.*, p.8)こそが重大な作用をもつという理解、これが「図-地」という方法的枠組の淵源にあるといえよう。メディア自体の技術的な過程や機能に視野を限定することなく、それが関わる社会の全体的な技術的、文化的環境を射程におさめる「環境論」的視点で、「図-地」の理論的枠組の核心をなしているのである。

こうした視点が顕著化した背景に、デジタル・メディアによって全体的な連結を加速化させる、現代の情報環境の現実があったことは想像するにたたくない。だが、そうした背景があったにしても、「図-地」の理論的枠組が「環境論」的な分析視点の顕著化だとすれば、その実質はすでに64年の *Understanding* にあり、晩年に顕著化した「図-地」の枠組は、たんなる装いのリニューアルにすぎない、ということにはならないだろう。

W・T・ゴードンは、「図-地」の理論的枠組の意義づけが変化した経緯を大まかに提示している。彼によると、マクルーハンは、この方法的枠組に関する論文の草稿を1965年に書き、周囲の人々に回していた。また彼は、同年のマクルーハンの手紙に、「メディアは、そのものとしては地をなすものであり、まれにしか認識されない¹²⁾」という文章があることも明らかに

10) M. McLuhan, *The Gutenberg Galaxy*, Routledge & Kegan Paul, 1962.

11) [] で示されているのは、該当する翻訳書のページ数である。以下同様。

12) W.T. Gordon, *op. cit.*, p.428.

している。そしてゴードンは、さらに淵源をさかのぼり、こうした理解の実質は、アルファベットの文化的作用を論じた *Gutenberg* にすでにあったとまでいう。ところが彼は、この枠組の顕著化の意義について、次のように論ずる。

そこには新しい発見があった。問題が図／地関係として描きだされ、事実を図／地関係がカバーする他の事実と統一させてとらえることが可能になったのである¹³⁾。

ゴードンは「新しい発見」という。だがその内実は、すでに60年代前半に成立していたさまざまな知見が、「図-地」という共通の装いを獲得し、統一的に整理されたということ以上ではない。はたしてこの理解は、77年時点で、『『メディアの理解』』というものが、そのサブリミナルな地の研究のことだとわかったのはごく最近なのです¹⁴⁾』と書いたマクルーハンの思考を、十分にくみとれているのだろうか。

J・M・ストゥリーゲルの理解は、問題の理論的「転換」の内実を、より明確に描きだしている。彼はこの「転換」を、「アナロジー・モデル」の採用と整理する¹⁵⁾。彼がこの名称を用いるのは、問題の理論的転換が、あるメディアと特定の知覚様式や思考様式との関連といったかたちで、「諸対象間の線状的ないしは論理的な連結関係」を分析する方法から、「諸対象のあいだの関係性 relationship やパターンに焦点をさだめた¹⁶⁾」方法への移行だからである。つまり、マクルーハンは、特定の技術と思考形態のような「図」同士の関連を、線状的な因果関係として説明する方法の限界を意識し、複雑に絡みあう「地」の諸契機の関係性、あるいは

「図」と「地」の相互関係のパターンを、アナロジー的枠組で分析する方法を強調するにいった、というわけである。

ストゥリーゲルは、この理論的「転換」は68年までには明確化していたとし、自身が親交を深めた70-72年の時期に、マクルーハンが大学院セミナーで提出した諸問題にそれが反映されているという¹⁷⁾。確かに、72年刊の *Take Today* の冒頭の節には、著作の全体的視点を示すかのように、「図-地」関係の方法的枠組がシャープに提示されている。

何ごとも、それ自体として孤立したかたちで意味をもちあはしない。どんな図も必ず地または環境をもっている。言語の地から切り離されたある言葉は役に立たない。孤立したある音は音楽ではない。意識は、あらゆる感覚を巻きこむ共働作用なのである¹⁸⁾。

「何ごとも」といわれている以上、人は、「言葉」や「音」をメディアに、「意識」をメディアの作用に読みかえることができる。実際、後に示すように、この著作自体のなかでも、この枠組でメディアの現象を分析した叙述があるし、同年の手紙¹⁹⁾、あるいは有名なW・B・キーの著作に寄せた「序文²⁰⁾」にも、「図-地」関係に基づくメディア理解が見られ、その後の著作や発言にも同様の理解が散見されるようになるのである²¹⁾。

17) *Ibid.*, p.101.

18) M. McLuhan and B. Nevitt, *Take Today The Executive as Dropout*, Harcourt Brace Javanovich, 1972, p.3.

19) Cf., W. T. Gordon, *op. cit.*, p.307.

20) Cf., M. McLuhan, 'Media ad-vice: an introduction', in W. B. Key, *Subliminal Seduction*, Mediaprobe, 1973, p.xi.

21) たとえば、74年発表の 'At the moment of Sputnik the planet becomes a global theater...', in G. Sanderson and F. Macdonald (eds.), *op. cit.*, pp.74-75 を参照。

13) *Ibid.*, p.313.

14) *Ibid.*

15) Cf., J.F. Striegel, *Marshall McLuhan on Media*, University Microfilm International, 1981, p.100.

16) *Ibid.*, p.103.

ではそこに潜んでいる理論的な「転換」の内実とは何か。ストゥリーゲルは、「何らかのテクノロジカルな刷新が、物理的、心理的、社会的な環境のうちで引き起こす、多次元的な multidimensional 関係性を同時並存的に simultaneously あつかう²²⁾」方法に注目する。なるほど、たとえばナチ政権下でのラジオの働きは、決してラジオの技術的機能(図)のみによってもたらされたのではない。そうではなく、経済状況、大戦以来の政治意識の歴史的推移、そして他の「国民的」電子メディアの不在、といった諸々の社会的環境(地)との多元的な関係性が織りなす現象だったのである。

だが、こうした効果のレヴェルで、メディアと社会環境との関係を重視する方法は、決して70年以降に初めて顕著化したものではない。新聞が、文化環境の異なるアメリカとソ連で対照的な働きをもつことを、切れ味鋭く解明した *Understanding* の叙述 (Cf., pp.207-208) は、それを端的に示している²³⁾。メディアの効果に関する「図-地」の理論的枠組の採用は、整理のリニューアルにすぎない。だが、一方でストゥリーゲルは、この理論的枠組について「テクノロジカルな刷新が生起する物理的、心理的、社会的な環境の文脈に対して、その刷新がおよぼす影響を吟味する方法²⁴⁾」であるともいっている。注意せねばならない。環境に多次元的な作用をおよぼすメディア自体が、多次元的な環境の文脈から生起するとされている。ストゥリーゲルが「図-地」の枠組に読みとったもの、それは、メディア(図)と環境(地)の相互作用への視線である。

図と地の関係性は、一つの相互作用の状況を構成する。……図と地の相互作用は固定することはない。そうではなくそれは、認識をめぐる一つの効果であり、それゆえ状況に規定されている²⁵⁾。

彼のマクラーハン理解が正当だとするならば、マクラーハンは晩年にいたって、少なくとも客観的には、その理論の「転換」をはたしたといえることができる。周知のように彼は、*Gutenberg* 以来、アルファベットが西洋的な思考と文化の形態を形成したと繰り返し論じた。また、テレビが、活字文化で軽視されてきた、多元的に諸感覚を共働させる共感覚 *synesthesia* の知覚様式を優勢にさせ、若者達に社会への関与を生み出すという理解も、幾度となく表明した。これらの議論では、与えられたメディアが、一方的に人間の認識様式、文化構造に作用する関係が強調されている。だがマクラーハンは、70年代における「図-地」の理論的枠組の顕著化にともなって、メディアに対して、人々が形成している社会文化的環境の方が作用をおよぼすという、それまで背景に追いやられていた「裏」の関係を、その射程におさめるにいたったのだ。知識をめぐる「図」と「地」の相互作用を強調する *Take Today* の一節によって、この「転換」を確認しておこう。

データのインプットは、介入要因によって転形させられる諸関係の地、場、状況に入ってゆくが、同様にまたそのインプットのほうも転形をこうむる。古いものであれ新しいものであれ、知識というものは、新しい環境との「対面」によってつねに恒常的な変容をこうむる図なのである²⁶⁾。

22) J. F. Striegel, *op. cit.*, p.101.

23) この点は、拙稿「形態としてのメディア、思考のハイブリッド」(M・マクラーハン/ B・パワーズ『グローバル・ヴィレッジ』青弓社、所収)で詳しく論じられている。

24) J. F. Striegel, *op. cit.*, p.100.

25) *Ibid.*, p.112.

26) M. McLuhan and B. Nevitt, *op. cit.*, p.86.

この叙述は、直接にはメディアやテクノロジーを問題にするものではない。だが、人間の用具も思考物も人工物 artifact として同様にあつかうマクルーハンの理論構成からすれば、この知識に関する叙述は、メディアと社会的環境の相互作用にもあてはまるといえよう。ストーリーゲルの報告によれば、実際にマクルーハンは、ほぼ同時期に、直接メディアについてこの相互作用の視点を強調していた。

自動車は、それからまったく独立した諸々のサービスの地のなかにある、一つの図です。.....ハイウェイや製造業者や石油会社は、自動車という図の地をなしており、この地がメディアとしてあるのです。より完全ない方をするなら、メディアとその諸作用を創出するのは、図と地の相互作用なのだ、ということです²⁷⁾。

テクノロジーが文化形態に影響するというだけでなく、社会の環境的な諸要因がテクノロジーの「創出」にさいして作用すると主張する論理、これが、「図一地」の理論的枠組によって達成されたマクルーハンの理論的「転換」にほかならない。

この「転換」は、技術決定論 technological determinism の問題に関わる。マクルーハン自身は、この立場を肯定したことはなかった。しかし彼の言説は、少なくとも67年の *The Medium is the Massage*²⁸⁾ までは、テクノロジーの規定作用を強調するトーンをおびており、それは晩年まで尾を引いたようにも思われる。もし、「図一地」の理論的枠組の顕著化を通じて、彼のメディア理解の大部分が改められることになるのだとしたら、ことは重大である。そこで章をあらためて、ことの次第を確認してみることにしよう。

にしよう。

2. There is no inevitability—技術決定論への最終的解答

マクルーハンは最後の著作において、技術決定論を明確にしりぞけた。

メディア決定論 media determinism, つまり新しい文化的な基盤が、新しいテクノロジーの作用によって否も応もなく押しつけられてゆく事態は、使用者がよく適応する場合、すなわち熟睡している場合にのみ可能である。.....だが、注意をはらうべき自発的態度があるかぎり、不可避なものなどない (*Global Village*, pp.11-12 [29])。

この一節は、マクルーハンが、技術決定論にくみしないことを明確にする必要を感じていたことを示している。だがそれは、60年代以来の彼自身の言説にも跳ね返ってくるものである。結論の先取りになるが、この一節は、彼のメディア論が、晩年に一つの「転換」をはたしたことを示している。しかしそれは、彼の理解を技術決定論として批判してきた論者たちが正しかったことを意味しない。問題はもう少し複雑である。批判者たちの議論の多くは、マクルーハンの挑発的な短縮語法に拘泥し、彼の言説の趣旨を誤解するものだった。彼が晩年に「再考」したポイントは、こうした批判者の論点とは異なる。そこでまずは、批判者たちの論点がマクルーハンにとっての問題ではなかったことを示しつつ、彼が晩年に直面した問題をあぶりだしてゆくことにしたい。

ここでは、試みに、批判の論点を三つに分類して吟味することとしたい。まず、テクノロジーが、各々の使用者の知覚(認識)の態勢や思考と行動の様式を規定するかどうか、という問題がある。たとえば、S・フィンケルsteinは、かの「悪名」高き「ホット・メディア」と「クー

27) J. F. Striegel, *op. cit.*, p.111.

28) M. McLuhan, Q. Fiore, *The Medium is the Massage*, Random House, 1967.

ル・メディア」の議論は、メディアの作用を身体の感覚的次元の問題に還元する「一種の自然主義²⁹⁾」だと批判する。確かに、精細度の高い「ホット・メディア」では受け手が関与する involve 余地は少なく、精細度の低い「クール・メディア」では、情報の不足を補完しようとして、受け手の関与度が高まるというマクルーハンの主張 (Cf., *Understanding*, pp.22-23) には、メディアの技術的な事情から関与度の強弱を導きだす論理の飛躍がある。いうまでもなく、受け手の関心と注意の強弱は、メッセージ内容と受け手の文化的関心の関係、社会的状況の中でのメディア同士の配置などにも影響される。その限りでは、マクルーハンが「直接的な身体的インパクト³⁰⁾」だけで問題を考えているとしたフィンケルステインの指摘は、正当なものだった。

フィンケルステインの批判は、のちに「決定論的な物神崇拜³¹⁾」という言葉をマクルーハンにあげさせた、J・フェケットの批判と同趣旨である。それは、「ホット」と「クール」の議論に関しては考慮に値する。おそらくマクルーハンは、メディアの技術システムが受け手の感覚に与える影響を浮き彫りにするために、議論の範囲を技術面に限定し、「他の条件が同じならば」という仮設的抽象を試みたのだろう。そうした議論の設定を明確にしていない彼の叙述には、確かに不備がある。だが、フィンケルステインがこの問題を、彼のメディア論全体に通ずるものと見なすとき、重大な「誤解」がはじまることになる。

彼は.....一時代の現実的な特徴のいくつかを記録し、そうして時代の変化を、ある選ばれた「テクノロジー」または「メディア」が

人々の感覚におよぼす神秘的で魔術的な働きに帰するのである³²⁾。

ここにこそ、マクルーハンの理解を技術決定論と見なす「誤解」の、基本的なパターンがある。ある限定的な文脈において、技術のシステムとその特性が受け手の知覚と思考の態勢を枠づけることを強調する叙述を、メディアの現象全体に関する理解として拡大解釈する「読みこみ」、これが多くの批判のパターンなのである。テキストは、全体的文脈において読みとられねばならない。フィンケルステインは問題にしていなが、マクルーハンは、まさしく「ホット」と「クール」を論じた章の後半で、次のように述べている。

ホット・メディアがホットな文化で用いられるかクールな文化で用いられるかによって、大変な違いが生ずる。ラジオというホットなメディアが、クールな、あるいは非文字的な文化で用いられると、暴力的な作用をおよぼす。それは、たとえばラジオが娯楽と受けとられているイギリスやアメリカとは、まったく違う作用となる。(*Understanding*, pp.30-31)。

マクルーハンは、ラジオの働きを左右する要因として、受け手が浸されている文化の状況を明確に指摘している。同じことは、先述した新聞の働きの違いに関する議論にも確認できる。J・スタンプスがいうとおり、「マクルーハンにとって、メディアのインパクトは、それ自体、それを使用する文化によって媒介されている³³⁾」ものだったのである。

二つ目の論点に移ろう。それは、マクルーハンの議論で、メディアとテクノロジーが、社会

29) S. Finkelstein, *Sense & Nonsense of McLuhan*, International Publishers, 1968, p.84.

30) *Ibid.*, p.84.

31) J. Fekete, *The Critical Twilight*, Routledge & Kegan Paul, 1977, p.163.

32) S. Finkelstein, *op. cit.*, p.97.

33) J. Stamps, *Unthinking Modernity*, McGill-Queen's Univ. Pr., 1995, p.124.

の文化的構造を規定するものとされているかどうか、という点である。この点を問題にする議論の典型は、先に触れたJ・フェケットのものだろう。彼は、マクルーハンの議論は、テクノロジーを「直接または間接に社会を規定するもの」としており、「たんに社会的心理的な変化を引き起こすものとしてでなく、変化の唯一の原因として描きだす³⁴⁾」ものだという。彼の批判は、直接にはマクルーハンの次の叙述に向けられている。

メディアはすべて、私たちがそっくり作りあげる。それは、その個人的、政治的、経済的、美的、心理的、道徳的、倫理的、社会的帰結がきわめて全面的なので、私たちのうちの誰も、それらに触れず、それらから影響をうけずにいることはできない³⁵⁾。

だが、注意せねばならない。この文章は、メディアの作用が社会のあらゆる領域、すべての成員におよぶ、という趣旨で理解しうるものである。実際、引用された叙述の直後に彼は、「社会と文化の変化に関するどんな理解も、メディアが環境として作用する仕方についての知識なしには不可能である」と書いて、議論をしめくくっている。フェケットの批判は、空振りだといえよう。この点では、むしろR・コステラネットの批評のほうが的を射ている。彼は、「マクルーハンは、『技術決定論』としかいいようのない立場を信奉している³⁶⁾」としながら、その具体的論点として、L・ホワイト Whiteの技術史研究に依拠していることをあげる。確かにマクルーハンは、鎧、爪付きの蹄鉄、馬の首輪の発明が中世を生みだしたとするホワイト

の歴史観を、随所で引いている。だが、その引用の趣旨は、それらの技術が中世社会の構造全体を決定したというものではない。たとえば、彼は「封建制度は鎧による社会的拡張である」(Understanding, p.179)と論ずるが、その趣旨は、鎧を装着した騎馬戦が一般化すると、重装備を用意できる者とできない者が階級的に分化したということに尽きる。同じ章に、蹄鉄や馬の首輪に関するホワイトの議論の引用も見られるが、それも、空間的移動力の向上と情報速度の増大が、集権化を可能にするという議論(Cf., *ibid.*, pp.89-105)にほかならない。それらは、「技術決定論」というよりも、「テクノロジーの重要性³⁷⁾」を主張する論述というべきものなのである。

最後の論点に移ろう。それは、テクノロジーに対する人間の主体性の問題である。しばしばマクルーハンは、人間をテクノロジーに従属する存在として位置づけていると批判されてきた。たとえばフェケットは、マクルーハンの議論が、人間をテクノロジーにしたがう受動的な機械として描きだすもののだとして、彼の次のような叙述を引用する³⁸⁾。

継続的にテクノロジーを受け入れることによって、私たちは、それらを自動制御メカニズムとするような関係を取りむすぶ。これこそ、私たちが自分たちの拡張であるそれらを使用するさいに、それらを神ないしはちょっとした宗教のごとくあつかって仕えねばならない理由なのである (*ibid.*, p.46)。

確かにマクルーハンは、人間がテクノロジーの展開に忠実にしたがう事態を描きだしている(Cf., *ibid.*, pp.83-4, 177)。W・クーンズも、こうした点を指摘しながら、マクルーハンにとって、人間に対するテクノロジーの「条件づけは、

34) J. Fekete, *op. cit.*, pp.181, 163.

35) M. McLuhan, Q. Fiore, *The Medium is the Massage*, p.26.

36) R. Kostelanetz, 'Understanding McLuhan (in part)', W. E. Moore, *Technology and Social Change*, Quadrangle Books, 1972, p.92.

37) *Ibid.*

38) Cf., J. Fekete, *op. cit.*, p.166.

強力で不可避的でとらえがたいものであり、人間は「受動的な役割³⁹⁾」しかもたないと批判している。だが、こうした批判は、マクルーハンの議論の文脈をとらえそこねている。フェケットが問題とした文章は、とくにその論理的な位置に注意すべきものである。問題のくだりは、*Understanding* の「メカ好き」の章の後半にある。ここで彼が主張したのは、テクノロジーに対する人間の自覚の欠如である。つまり彼は、テクノロジーは人間の身体の拡張だが、その拡張が人間に緊張と負担を強いるとき、人は知覚と認識を麻痺させる「自己切断 amputation」によってそのテクノロジーを独り歩きさせ、あたかも催眠にかかったかのようにその文化変容に身をまかせる、というのである (Cf., *ibid.*, pp.41-47)。

テクノロジーへの帰依という議論には、こうした前提条件がある。「私たち自身の身体を拡張を、実際に外にあるもの、自分とは切り離されているものと見なすナルキッソスのような態度をとるかぎり、あらゆる技術の挑戦を受けてはバナナの皮に滑って転ぶのと同様のことを繰り返すことになる。」(*ibid.*, p.68) それは、私たちの特定の態度を条件とした事態であって、その条件が変わるなら、私たちはテクノロジーとの関係を再調整しうるはずである。現代が「無意識をいちじるしく意識する時代」(*ibid.*, p.47) であり、メディアの全体的認識を可能にする時代だとするマクルーハンの論旨は、そのことを主張している。だが、その条件の転換は可能なのか。彼の主張するゾレンは、テクノロジーへの運命的な従属を前にした、はかない望みにすぎないということはないのか。

この点では、P・グロスウィラーの指摘に耳を傾けるべきだろう。彼によれば、マクルーハンは、テクノロジーに関する「自覚と変化を可能にする余地を模索して、複数のメディアがハ

イブリッドに混交する状態に見られる裂け目を掘りあてようとしている⁴⁰⁾。」彼は正當にも、*Understanding* の「ハイブリッド・エナジー」の章に、人々がテクノロジーの全体的な構造を自覚し、それとの関係を再調整する可能性の基盤を見いだしたのである。確かにそこには、「人間の自律」(*ibid.*, p.51) に関する希望の言葉が見られる。

これらのメディアは、私たち自身が拡張したものであるから、それら相互の作用と進化は、私たち次第ということにもなる。……もしそれらのメディアの作用を細やかに探究することをいとわなければ、もはや困惑する必要はない (*ibid.*, p.49)。

確かにマクルーハンは、複数のメディアの混交に、テクノロジーへの従属から脱出する可能性を見ていた。とりわけ、新旧のテクノロジーが混交する中で、両者の比較を通じて、古いテクノロジーが特定の認識と行動の構えに基づいていたこと、つまり人間自身のあり方に依存していたことがとらえやすくなる事実は、見逃してはならない点だろう。

マクルーハンは、テクノロジーを前にした人間の主体性、「自律」を模索したのであって、決して「物象化された客体的決定⁴¹⁾」にとらわれていたわけではない。マクルーハンは、こうした不用意な誤解に長年さらされてきたが、彼の最後の著作は、こうした誤解を明確にしりぞけるものとなっている。とりわけ、テクノロジーの全体的な「地」を認識せず、その「独り歩き」を放置する事態を「エンジェリズム」と批判する論述 (Cf., *Global Village*, pp.29-30) は、彼の真意を最終的に明らかにしているといえる。

人間の主体性の軽視という批判には、別種の

39) W. Kuhns, *The Post-Industrial Prophets*, Weibright and Talley, 1971, p.179.

40) P. Grosswiler, *The Method is the Message*, Black Rose Books, 1997, p.74.

41) J. Fekete, *op. cit.*, p.182.

問題に関わるものもある。それは、マクルーハンの「グローバル・ビリッジ」論が、一種のテクノロジー礼賛論だと批判するものである。批判者たちは、「グローバル・ビリッジ」が、人々の政治的連帯や経済的協力や文化的理解といった主体的実践によってではなく、グローバルに展開する「電子的情報環境」によってもたらされるという主張に、技術環境の発展が世界を変えるという「技術決定論」を見ていると見てよい。たとえば、I・C・パーカーは、マクルーハンの議論は「現存する電子的なテレコミュニケーション・メディアの一層の発展に焦点を定めた希望のイメージであり」、このメディアの発展が「グローバルな調和の舞踏をもたらす」ことを主張する、「還元主義的なたぐいの技術決定論⁴²⁾」だという。だがそこには、技術決定論の問題以前に、「グローバル・ヴィリッジ」の概念をめぐる誤解が存在する。

パーカーの理解は、マクルーハンの主張とは異なる。「グローバル・ヴィリッジ」の基本概念は、次のようなものである。「電子メディアは、世界を縮小してすべてがあらゆる人にとって同時的に生ずる一つの村ないしは部族のようなものにしてしまう。すべての人が、あらゆる出来事をそれが起こるやいなや知り、だからまたそれに参与する⁴³⁾」。それは、電子メディアがもたらした世界的な情報関係の近しさを、「ごく小さな村」(*Understanding*, p.255)の人間関係に比した言葉にすぎない。「『グローバル・ヴィリッジ』という語は、それがおかれた文脈の中でのみ、またマクルーハンがその文脈を通じて強調しようとしたことを伝える目的との関連においてのみ意味をもつのである⁴⁴⁾。」

「グローバル・ヴィリッジ」という概念自体には、生活秩序における調和や統一や共同という含意はない。実際に彼は、G・E・スターンとの有名なインタビューで次のように語っている。「村的な条件が生みだされると、それだけ裂け目や不和や多様性も生みだされる。間違いなくグローバル・ヴィリッジは、あらゆる地点で最高度の争いを確実なものにする。.....それは、人々がつねに互いに深く出会う世界にはかならない。.....村は、理想的な平和と調和の場所ではなく、まったくその反対なのだ⁴⁵⁾。」

「グローバル・ヴィリッジ」は、世界の政治的・経済的統一と文化的調和の実現ではない。だが、たとえそうだとすると、情報環境としての世界の統合と全体的関与が、「カトリック・パラノイア」ともいわれる彼の理想を実現する基盤とされていることも否定できない。彼は、よく知られた *Playboy* 誌とのインタビューで次のように語っている。

電子的なメディアによって最終的には可能となる心理的な共同体の統合は.....ダンテが予見した意識の普遍性を創出するでしょう。.....キリスト教的な意味でいえば、これは、キリストの神秘的な身体の新しい解釈にすぎません⁴⁶⁾。

「最終的には」電子的なテクノロジーがグローバルな心理的統合を可能にするという叙述は、技術主義的な楽観主義の表明ではないのだろうか。すなわち、W・クーンズが問題とした「電子的なエデンの園」の展望、すなわち「電気技術的なメディアに究極の輝かしい、豊かな世界の約束を見る⁴⁷⁾」見地が、マクルーハン自身のものだったのではないか、そう問いたくなるの

42) I. C. Parker, 'Myth, telecommunication and the emerging global informational order', in *The Global Political Economy of Communication*, Macmillan, 1996, p.51.

43) E. Carpenter and M. McLuhan, *Explorations in Communication*, Beacon Press, 1960, p.xi.

44) W. Kuhns, *op. cit.*, p.195.

45) G. E. Stearn (ed.), *McLuhan Hot & Cool*, Penguin Books, 1968, pp.314-5.

46) E. McLuhan and F. Zingrone, *Essential McLuhan*, Routledge, 1995, p.262.

47) W. Kuhns, *op. cit.*, p.193.

である。実際、A・マテラートは、マクルーハンは「すべてのことは、唯一、テクノロジーの命令によって生起してきた」と考え、『コミュニケーション革命』が、政治革命では決して解決へと近づくことのできなかつた諸問題を、すでに解決しはじめた⁴⁸⁾と見なしている、と批判している。だが実は、マテラートがこの批判の根拠として引用するマクルーハンの言説は、批判者が考えるよりも慎重なものである。

瞬間的な〔情報〕スピードの中では、原因と結果は少なくとも同時的なものになる。そして、まさにこの次元で、それに馴染んだすべての人に対して、諸々の出来事に運命的に参与するのではなく、希望に満ちてそれらを予見する必要が、当然のように示唆される。公衆の参与の可能性は.....一種のテクノロジーの命令 imperative となる⁴⁹⁾。

確かに「テクノロジーの命令」といわれている。だが、テクノロジーが命ずるのは、地球的な全面的参与の「可能性」であり、さらにそうした参与は、運命的に強えられるものではないとされている。ふりかえってみれば、先に触れた「心理的な共同体の統合」も、電子のテクノロジーによって「可能となる」ものとされていた。テクノロジーが喚起するのは、グローバルな文化的統合の「可能性」であって、その実現ではないのである。

この見地は、*Global Village* でより鮮明に表明されている。そこでは、「グローバル・ヴィリッジ」が、西洋的な文化形態と東洋的な文化形態の同時並存、そして両者の対立と葛藤として描きだされている (Cf., *Global Village*, pp.x [10-11], 68 [109])。それは、先の誤解

への明確な解答だといえよう。だが、それだけではない。彼はこの対立と抗争から脱出する道を模索して、両者の「共働 working together」と「並立 apposition」(*ibid.*, p.80 [125-126]) を引きうけることを訴えているのである。

20世紀の後半に、東洋は西の領域に堰を切ったようになだれこみ、西洋は、あらゆるところで暴力を回避するために、互いに折あいをつける絶望的な試みをしながら、オリエンタリズムを抱えこむことになるだろう。だが、平和への鍵は、双方のシステムを同時並存的に理解することなのである (*ibid.*, p.x [11])。

これは、「グローバル・ヴィリッジ」の対立と抗争を、可能なかぎり調和と統一へと導くべき、人々への呼びかけにほかならない。そして、まさにこの主体への呼びかけが、誤解なくとどけられるためのシグナルとして、本章の冒頭に引いた文章は書きとめられているのである。「注意をはらうべき自発的態度があるかぎり、不可避なものなどない。」

私たちは、類似した批判の多さを頼りにして、マクルーハンの主体性を否定したという解釈を、既成事実化してはならない。その意味では、かのR・ウィリアムズが、彼の議論を「外見上洗練された技術決定論」と呼んだことについても、その「権威」を割り引いておく必要がある。マクルーハンの議論は「孤立的に『メディア』を問題にする理論」であり、「テクノロジーを勝手に展開させる let technology run itself⁵⁰⁾」ものだと断ずるウィリアムズの批判は、やはり、彼の議論の全体像を踏まえたものとはいえない。

マクルーハンは、以上の論点をめぐっては、その立場を再考する必要はなかった。しかし実

48) A. Mattelart, *Mapping World Communication*, Univ. of Minnesota Pr., p.126.

49) M. McLuhan, 'At the moment of Sputnik the planet becomes a global theater...', *op. cit.*, p.80.

50) R. Williams, *Television*, Schocken Books, 1975, pp.127, 128.

は、彼の議論にはある重要な問題が残されている。それは、最後に言及したウィリアムズが、「メディアは実際には決して実践として考慮されていない」と批判し、「考慮されるべきものは、.....テクノロジーが同時に意図に基づくものであり、ある特定の社会秩序の結果だと見えず、根本的に異なる立場なのである⁵¹⁾」と論じた点に関わる。

ウィリアムズが突きつけたのは、メディアを「特定の社会秩序の結果」、あるいは社会的諸関係の中での文化的実践として考慮する視点だといつてよい。なるほど、すでに確認したように、マクルーハンはメディアに対する社会の諸関係と文化的環境の影響を強調した。彼の最後の著作にも、コンピューターを基礎としたグローバルな情報環境で生ずる現象は、第一世界と第三世界とでは大いに異なるという指摘がある (Cf., *ibid.*, pp.69 [110], 85-6 [133-4])。だがそれは、与えられたテクノロジーの意味と作用に関する議論である。では、テクノロジーが存在するにいたる過程、すなわちその成立と誕生に関してはどうか。この場面でのマクルーハンの議論に、技術決定論が、そして主体性の軽視がないかどうか、これが残された問題なのである。

D・J・ツイトウロムは、マクルーハンの立場を「テクノロジー的な自然主義⁵²⁾」の形をとった決定論だと批判したさいに、次の文章を引きあいでしている。

人間は、植物の世界の蜂のように、いわば機械の世界の生殖器となり、それがつねに新しい形態を受胎させ進化するのを可能にする。機械の世界は、人間の願望と欲求を促進することで、つまり富をもたらすことでその愛に

応える (*Understanding*, p.46)。

確かにここには、テクノロジーの「生命」過程に奉仕する器官という人間の位置づけ、テクノロジーの成立をめぐる人間の主体性の空洞化がある。

実は、このくだりをめぐっては、P・レヴィンソンとマクルーハンとのあいだで興味深いやりとりがあった。レヴィンソンは、78年の博士論文の中で、問題のくだりを引きあいで出して、マクルーハンを「メディア決定論者」として批判した。ところが、この論文に目を通したマクルーハンは、レヴィンソンの自宅の留守電に、自分をメディア決定論者と呼ぶのは「ただでない」というメッセージを残したというのである⁵³⁾。彼は「メディア決定論者」と呼ばれることを拒んだ。だが、むしろポイントは、彼がテクノロジーの生殖器という人間の位置づけを否定しなかったという点にある。確かに、「人間はその存続のために、自分たちの必要にもっとも適したメディアを選択する」というレヴィンソンは、テクノロジーに対する人間の主体性を一方的に強調しすぎるきらいがある。だから、このレヴィンソンの立場に対して、テクノロジーは人間のあり方を規定するという理解を対置したマクルーハンの応答は、やりとりの関係に依存したものとして、やや割り引いて受けとめる必要がある。その意味では、彼は「私たちがメディアの産物または結果なのであって、その逆ではない⁵⁴⁾」と考えていた、というレヴィンソンの断定はやや性急だろう。とはいえ、マクルーハンは批判された「テクノロジーの生殖器」という規定を再考し、新たな理解をレヴィンソンに伝えようとはしなかった。やはり彼は、この時点でも、テクノロジーの成立をめぐる人間の主体性の位置づけに、いまだ不明瞭な部分

51) *Ibid.*, p.127.

52) D. J. Czitrom, *Media and the American Mind from Morse to McLuhan*, Univ. of North Carolina Pr., 1982, p.178.

53) P. Levinson, *Digital McLuhan*, Routledge, 1999, p.182.

54) *Ibid.*, p.183.

を残していたように思われる。

マクルーハンの最後の著作は、この残された問題をめぐって、ある種の理論的「転換」を表明している。思い起こしていただきたい。先に見たように、「図-地」関係の理論的枠組を顕著化させたマクルーハンは、メディアとその作用を、「図と地の相互作用」においてとらえる視点を明確にしていった。だとすれば、テクノロジーが社会的環境に作用するだけでなく、逆に、社会の環境的な諸要因のほうがテクノロジーの成立に作用をおよぼす関係も、理の当然として射程に入ることになる。そして、この環境のうちには、テクノロジーを用いて世界と関わる、人々の経済的、政治的、文化的実践が含まれている。「地」としての社会的環境の作用を考慮する視点は、必然的に、そこに含まれる使用者の主体的実践の意義づけへと導くのである。かくしてマクルーハンは、晩年に確立したテクノロジーの分析パターン、テトラッドについて、次のように論ずるにいたる。

テトラッドは.....人工物（または創設的な考え）がつねに使用者の精神性 *mentality* の産物であることを明らかにする。それは、逆説的なことだが、使用者を地として含んでもいる。私たちは自らを形づくるのであり、私たちが形づくるものが現実として認識される (*Global Village*, p.10 [28])。

「機械の世界の生殖器官」とされていた人間は、ここにメディアとテクノロジーの創設者として「再発見」されるにいたる。本章冒頭で紹介した一節、「注意をばらうべき自発的態度があるかぎり、不可避なものなどない」という言明は、こうした理解の枠組のシフトを反映している。そしてその言明は、あたかもレヴィンソンとのやりとりを意識したかのごとく、「メディア決定論」の否定という形をとっているのである。

マクルーハンのこの「転換」は、理論全体に浸透するまでにはいたらなかった。とりわけア

ルフアベットの作用については、晩年の両著作にも、旧来の言説を踏襲した叙述が散見される。たとえば、「アルファベットの、視覚的な空間を創出し、それとともに、サーヴィスと経験が織りなす線状的で視覚的な『外的世界』の環境（建築やハイウェイから具象的なアートにいたるあらゆるもの）を創出した」(*Laws*, p.73 [101])といった叙述がそれにあたる。「すべてのはじまり」(*Global Village*, p.131 [194])であるアルファベットには、新たな方法的視点の自己適応的な適用はなされなかったということなのだろうか。だが、こうした曖昧さと不備に振りまわされて、問題の「転換」の意義がぼかされてはならない。たとえ不十分な形ではあれ、進められていた「転換」がどこに向かおうとするものなのかを見定めてゆく思索、それを彼のテキストはうながしているように思われる。

3. 視覚的な空間と聴覚的な空間の同時並存— ハイブリッド・カルチャーの模索

最後に、現代の情報環境に関する認識の微妙なシフトを問題としたい。マクルーハンは、60年代以来、電子メディアが浸透した現代のメディア環境では、(西欧の)人々はある種の「再部族化 *retribalization*⁵⁵⁾」を経験すると主張した。新石器時代への回帰を思わせるこの言葉が意味するところは、ひとまずは、人々を部族時代の口承文化から脱却させた文字文化の視覚的空間が、電子メディアに基づく聴覚的空間の浸透によって、ふたたび口承文化的に再編されてゆく、ということである。

こうした変容の内実として彼が強調したのは、主に四つのことである。第一は、視覚を他の諸感覚から分離して、孤立的に強化する文字文化の構成に対して、テレビにおける多感覚的な *multi-sensory* 知覚のような、共感覚的で多元

55) Cf., 'Playboy interview', in E. McLuhan and F. Zingrone (eds.), *op.cit.*; *Understanding*, p.172.

的な文化が優勢になるということ。第二は、「一時点には一つのこと」というアルファベットの線状の思考様式が、グローバルな電子メディアによって、世界の出来事を同時並行的に認識する様式に移行するという。また第三には、遠近法に典型的な、唯一の中心をもつ均質的な視覚偏重の空間認識が、多元的な諸契機の時並行的な相互作用を抱えこんだ、脱中心的な聴覚的空間認識に道をゆずるということ。そして最後に、出来事の時生的な関係の成立によって、事象を時間的序列でとらえる継起的な因果性の認識が立ちゆかなくなり、事象全体の相関的構成のパターン認識を基本とした因果性認識が台頭する、ということである。

こうした主張は、さまざまな反発を引き起こした。とりわけ、活字文化が電子メディアに凌駕されるという主張は、厳しい批判にさらされた。たとえば、B・H・バグディキヤンは次のようにいう。「新しいメディアは破壊的であり、また革命的でさえあるが、しかし新しいメディアも、眼と脳の有効な使用と人間の合理性の求めからして欠くことのできないものとして、アルファベットや文書を存続させるのである⁵⁶⁾。」なるほど、マクルーハンが「印刷された言葉は人間のもって生まれた性質に反する」が、電子的メディアは「豊かで自然な方法に回帰する⁵⁷⁾」と考えていた、というバグディキヤンの説明は不正確である。マクルーハンが問題としたのは、印刷技術自体が文化を歪めるということではなく、その展開の中でもたらされた視覚の孤立的強調が、口承文化的な諸感覚の共働を抑圧してきたということにすぎない。また彼は、活字文化に関する否定的な価値判断を表明してもしない。彼は、テクノロジーへの価値判断を極力避

け、その帰趨を見通すことを目指した⁵⁸⁾。実際、彼は、活字文化が可能にした「距離をおく態度 detachment」を「西洋人に付与されたもっとも効力のある贈り物」(Understanding, p. 178)だと論じ、TVなどのサブミナルな作用への免疫力を高めるために、「印刷のような、関連する別のメディアを解毒剤としなければならない」(ibid., p. 329)とも主張したのである。

しかし彼が、現代のメディア状況の客観的な推移として、電子メディアが浸透させる聴覚的な空間の多感覚性と同時並存性によって、視覚的な文字文化が衰微してゆくと考えていたのは事実である。たとえば彼は、コンピューターの発展の先に「無言語」の状況 (ibid, p.80) の可能性を論じ、電子メディアが発展させる「新しい文化は、言葉にまったく依存しない」(War & Peace, p. 65)ともいつている。そしてまた、「電気技術的なメディアは、その全体的な『場』を生みだす性格のゆえに、私たちがアルファベット、印刷、機械化の遺産として長らく受け入れてきた、形態と機能の断片化された専門分化性を除去する傾向をもつ」(Understanding, p.277)と書いたのである。

マクルーハンの最後の著作は、こうしたテーゼとは微妙な隔たりをもっている。彼の晩年の二つの著作は、視覚的な空間と聴覚的な空間の関係に、西洋文化と東洋文化の関係をオーヴァラップさせながら、現代のグローバルな文化環境を、両者が並存し葛藤をくりひろげる「共鳴する間隙」として描きだしているのである。Global Village が、その準備中には『共鳴する間隙』と題される予定だったという事実⁵⁹⁾は、マクルーハンにとってこの観点が相当重要だったことを物語っている。まさに「共鳴する間隙」

56) B. G. Bagdikian, *The Information Machines*, Harper Torchbooks, 1971, p.205.

57) *Ibid.*, p.184.

58) Cf., M. McLuhan, *The Mechanical Bride*, p.v ; G.E. Stearn(ed.), *op. cit.*, pp.318-9.

59) Cf., M. McLuhan and B. Powers, 'Euclidean space to outer space', *Et Cetera*, vol. 37, no.3, 1980, p. 224.

という言葉により、活字を中心とした視覚的な空間と、電子的なメディアが織りなす聴覚的な空間との並存と葛藤を論ずる晩年の著作は、視覚的な文化形態の衰微を予見した諸々の言説から、微妙にシフトしているように思われるのである。

かつてマクルーハンは、コンピューターの発展の先にある種の「無言語」の文化を予測した。ところが晩年には、文字は、「象形文字のような表意的な圧縮を促進する、多次元的な記号や警句に転換する」(*Global Village*, p.103 [155-6]) という慎重な表現が採用されている。また、印刷物についても、「聴覚の様式でも視覚の様式でも利用可能な多数のデータ・ソースの一部にすぎない、一つの表意的なマイクロフィルムのようなものに移しかえられる」(*ibid.*, p.47 [81]) として、形を変えて電子メディアと並存してゆく事態を予想している。それは、ドゥ・ケルコフが「コンピューターは、一種の電子書籍のようなものを提供することによって、テレビ的思考態度に傾いていた秤を部分的にアルファベットの思考に揺り戻すように作用している⁶⁰⁾」といい、レヴィンソンが「コンピューターは新たな種類の本と考える方が妥当だ⁶¹⁾」と語っているのを想起させる。視覚的な活字文化は端的に衰微するのではなく、形態と位置づけを変化させて、ニューメディアの聴覚的な文化との「共鳴」に向かうという理解。そこには、看過しえない認識のシフトがある。

だが、このシフトは、必ずしも眼前に展開するニューメディアの分析から生じたものではないようである。マクルーハンは、印刷物は表意的なマイクロフィルムになるという先の論述の直後で、次のように書いている。

この言葉とイメージの新たな相互作用は、

心理的に一つであろうとしている二つの脳が、実際に私たちの頭蓋にあることを自覚するなら、理解可能なものである (*ibid.*)。

問題とされているのは、活字の視覚的な文化形態(言葉)と電子メディアの聴覚的な文化形態(イメージ)の「共鳴」である。だが、ここで持ちだされている「二つの脳」の問題とは何なのか。実は、ここで意識されているのは、マクルーハンの76年頃から夢中になった⁶²⁾、左脳と右脳の機能的関連の問題にほかならない。つまり、問題となる認識のシフトは、両脳の機能的関連という主題の発見とつながっているのである。

彼は、J・ボウゲン Bogen やR・J・ Trotter などの最新の脳神経学の研究によりながら、左脳は、読み書きや計算といった線状的で継起的な思考、そして意味秩序の中でのラベリングに主に関わり、右脳は、空間的・触覚的な相関的構成の把握、分類整理ではなく形姿や感じによる認識に関わるという。一目でわかるように、そこには、視覚的な文化と聴覚的な文化の問題とパラレルな関係がある。つまり、活字文化の視覚的な空間では左脳が支配的な機能を担い、電子メディアが浸透した聴覚的な空間では右脳が支配的な機能を担う、という整理が成り立つわけである。

脳の両半球の分化した機能はきわめて対照的であり、「非共約的」(*ibid.*, p.8 [25]) であるとさえいえるが、近年の「分離脳」の諸研究は、両脳を連携させる脳梁の働きを浮き彫りにし、左脳と右脳の機能的な「相互交換」を明らかにしていたのである。このことが、マクルーハんにブレイク・スルーをもたらした。視覚的な文化をささえる左脳と、聴覚的な文化をささえる右脳とは、一つの心理的なまとまりをなしており、相互排斥ではなく、並立と共働の関係

60) D・ドゥ・ケルコフ『ポストメディア論』NTT出版, p. 26.

61) P. Levinson, *op. cit.*, p.114.

62) Cf., W・T・ゴードン『マクルーハン』筑摩書房, p. 210.

にある。だとすれば、視覚的な文化と聴覚的な文化も、相互排斥したり、一方が他方を凌駕するのではなく、一つの「共鳴」の関係のうちに並存しうるのではないか。この主題との出会いは、マクルーハンにそうした思考をうながしたように思われる。

これ〔両脳の対照的機能に関する分析〕は、たとえ西洋的な文明が——アルファベットの作用を通じて——聴覚的なものに関する自覚を押し殺してきたとしても、人間のあらゆる状況において、視覚的な空間と聴覚的な空間がつねに現存する、ということをも別の形で語りだしている (*ibid.*, p.55 [90-1])。

こうして、現代のメディア状況の帰趨をめぐって、活字文化を中心とする左脳の視覚的文化形態の位置づけに、微妙なシフトが生ずることになる。

問題は、私たちの文化と左脳の指向の残存物の性質にも適したモデルを発見する点にある。そうしたモデルは、地から孤立させられた抽象的な継起的関係や運動の代わりに、図と地の両方の並立 *apposition* (共働的に作用し、必要に応じてそれぞれ独立に作用する左脳と右脳の並立) を考慮に入れたものでなければならない (*ibid.*, p.80 [125-6])。

そもそも、左脳と右脳の連携と共働という主題にマクルーハンが熱中した背景には、彼が *War & Peace* 以来ずっと問うてきた、グロー

バルな文化的衝突の問題があった。視覚的な西洋文化と聴覚的な東洋文化が、互いに他からの作用に対して頑なな対抗の構えをとり、パニックを含む危険な闘争を繰り広げる世界の現状に対して、あるべき平和と調和のモデルを提示すること、この関心が彼を両脳の機能的関連の主題へと導いたのである。

種としての私たちの将来の発展は、共働可能な大脳皮質の左側と右側の関係と、二つの脳半球をむすびつける脳梁と呼ばれる幾百万もの神経繊維の効用を、どれだけよく理解するかにかかってくるだろう (*ibid.*, p.49 [84])。

彼は「脳の両半球における東洋と西洋の出会い」(*ibid.*, p.48 [83]) に、未来の可能性の基盤を見いだした。もちろんそれは、ひとまずメタフォリカルな理解の提示であり、具体的な完成を見てはいない。継起的因果関係の認識と相関的構成のパターン認識はどう共働するのか、環境の全体的な構成に同調する東洋的な態度と、事象の論理的な関連に立脚する西洋的な態度とは、どうやって並立し統一しうるのか。これらの問いに答えるには、マクルーハンの思考を越えて、現代のメディア環境の現実に分けいっていかねばならない。だがその探究は、本稿とは異なる問題設定を要求することになる。ここでは、マクルーハンの思想が、そうした探究の貴重な礎を提供していることだけを確認して、稿を閉じることにしたい。